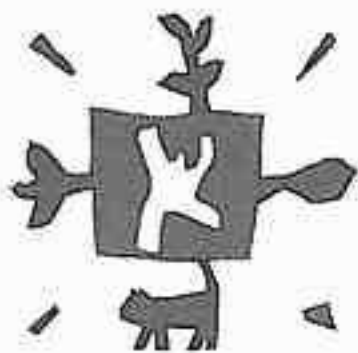




共同通信



2011年5月29日 177 (387号)

日本基督教団 西宮公会教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22
TEL.0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email: koudou@gamma.ocn.ne.jp
<http://koudou.jp/> 振替01170-3-4901

To tell the story 77 「素敵な出会いがありました」

共同幼稚園との出会いは7年前。我が子の初めての集団生活に、親の方がドキドキしていたのですが、「入園するのに子ども達が準備するものは何もありません。ただその日を楽しみに待っていて下さい」という直前のお知らせが心に残り、同時に肩の力がスーッと抜けたのを覚えています。そして、2人の子どもがこの共同幼稚園でたくさんの先生方やお友達と出会い、スペシャルな日々を過ごさせていただきました。

その後、保護者としてではなく、年長のお手伝いという形で順子先生に声をかけて頂き、今度は私が“とびきりスペシャル”な時間を過ごすこ

とになりました。年長さんと過ごした2年間は私にとって人生の中でもかなり濃い(?)、心も体も鍛えられた日々でした。

そして4月にまた、たくさんの出会いがあり、新たな気持ちでぽっぽ組と過ごさせていただいています。昨日まで“ママ〜”と涙目だったのに、今朝は“おはよう”と良い笑顔。“いちご嫌い”と全く食べなかったのに、今日は“おいしい〜”なんて言ってる！毎日が驚きの連続です。

この時期の子どもたち、一日一日どんどん成長しているんですね。その様子を近くで見ることが出来、一緒に笑ったり、季節のものをみんな

時代にふり回されるのではない
あの時 心を躍らせて生きた
後悔に 身をふるわせたこともある
笑い 泣き 歯ぎしりをした
今日 こんな決意をしたという

自分の人生を語ってほしい、
自分の人生を語ってほしい、
自分の人生を語ってほしい、
自分の人生を語ってほしい、
自分の人生を語ってほしい

で味わえる日々に幸せを感じています。そして、それぞれ小さな胸の中にはいろんな思いが詰まっていて……。時にはそれが“わがまま”だったり“言い訳”だったりする事もあるけれど、そこには何か思いがあるんですね、きっと。だから、そんな行動もとっても可愛いと感じています。

“可愛い”と言えば、我が家にもこの春、新たな出会いがありました。ベンガルという種類の子猫（男の子）が家族に加わったのです。先祖はアジアンレオパード（ベンガル山猫）だそうで、斑点模様が特徴です。名前は“エル（L）”、大きくなってね！との思いです。

でも、この猫を飼うまでに私自身特別な思いがありました。私がまだ独身で独り暮らしだった頃、大雨の日に、母猫とはぐれてしまったのか、一匹の子猫に出会いました。“このままでは死んでしまうかも”そんな思いから、その子猫を家に連れて帰りました。名前は“すみれ”。黒猫の女の子でした。それから2年後、仕事の都合で引っ越すことになり、引っ越し先ではどうしても猫を飼うことが出来ず、泣く泣く友人に引き取ってもらいました。

私はその時の、最後まで面倒を見てあげられなかった申し訳ない気持ち、先のことを考えずに家に連れて帰り、結局手放してしまった後悔がずっと胸の中で消えなかったのです。

“もう一度猫を飼いたい！！”という思いは、ずっと自分の中にはつきりとあったのですが、ずっと猫を飼うことを躊躇していました。

だから、今回猫を飼うにあたっては、何度も家族と話をしました。“命あるものだから、いい加減な気持ちでは飼えない”“病気もするかもしれないし、旅行にだって行けなくなるかも……”“お金だってかかるし、部屋だって汚れる”子どもたちにもそんな話を何度もしました。今思えば、それは自分自身に問いかけていたのかもしれない。そして、飼う決心をした時の私は、“かなり高齢だけど、もう一人子ども産むぞー！！”位の勢いだったと思います。最後は小6の長男（最近反抗期、プチ家出も経験しました）と小4の二男（まだまだ夜は私と一緒に寝ています）が、“俺達、絶対最後まで面倒みる。だから大丈夫”と背中を押してくれました。

そんなこんなでやっと我が家に迎えることができたので、そりゃあ可愛いに決まっています。もうメロメロです！でも猫っておもしろい。自分の体にピッタリ合う落ち着ける場所を上手に見付けるんですね。まるでヤドカリのように。体が大きくなると、違う場所にお引っ越し。最近エルは、阪急の紙袋にお引っ越し。よくその中でお昼寝しています。でも起きたらそのまま移動しようとしたりするので、突然紙袋が動き出し

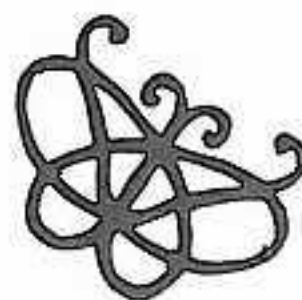
“ギョッ”とすることもあるのです。

こんな素敵な出会いが春から続いています。これからもどんな出会いがあるんだろう……。考えただけでわくわくしています。

7年前、この公同幼稚園と出会ってから、信じられないような素敵な出会いが続いています。“はじめのいっぽ”を踏み出した、可愛さ満点のぽっぽさんと過ごす毎日はとても新鮮です。

年長さんのことを「しろチーム」「みどりチーム」と呼んでしまう君たち……。どんなカッコイイ年長さんになるのか、今からとても楽しみです。このたくさんの出会いを大切に、これからも過ごしていきたいと思います。

(松岡 恵美)



日本基督教団西宮公同教会集会案内

早天祈禱会	毎月1午前6時30分から	於：西宮公同教会集会室
教会学校	毎週日曜日午前9時から	於：西宮公同教会礼拝堂
聖日礼拝	毎週日曜日午前10時45分から	於：西宮公同教会礼拝堂
聖書研究祈禱会	毎月第1・3水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
読書会	毎月第2・4水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
ゆつくり聖書を読む会	毎月第2曜日午前10時から	於：西宮公同教会集会室

2011年、わたしはあらためて、「神様 2011」を書いた。原子力利用に伴う危険を警告する、という大上段にかまえた姿勢で書いたのでは、まったくありません。それよりもむしろ、日常は続いてゆく、けれどその日常は何かのことで大きく変化してしまう可能性をもつものだ、という驚きの気持ちを含めて書きました。静かな怒りが、あれ以来去りません。むしろこの怒りは、最終的には自分自身に向かってる怒りです。今の日本をつわってきたのは、ほかならぬ自分でもあるのですから。この怒りをいいたま、それでもわたしたちはそれぞれの日常を、たんとんと生きてゆく、意地でも、「もうやになった」と、この生を放りだしたくないのです。だって、生きることは、どんな時でも、大いなるよろこびなのですから。

（「群像、2011. 6.」川上弘美）

「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」（マタイによる福音書11章30節）と、イエスが言う場合の「負いやすさ」「軽さ」で比べられている「負いにくさ」「重さ」は、何を想定したらいいのだろうか。『エリ、エリ、レマ、サバクダニ』それは『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』という意味である」「イエスはもう一度大声で叫んで息を引き取られた」と書かれて、「息を引き取られた」のが、十字架による処刑だったとすれば、その時の絶望、肉体的な苦痛は「負いにくさ」「重さ」において際だっていたように思えます（以上、同27章46節、50節）。

「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」と言った時のイエスにとって、自分が十字架で処刑されるなどということは思いもよらなかったことであって、その時は負いやすく、軽いと口にしていた訳ではありません。イエスとい

う生き方は、鋭い洞察や孤高の預言者の様にあつた訳でもありません。マタイによる福音書11章25節では、自分のことを「幼な子」と言っています。「知恵のある者や賢い者に隠して、幼な子にあらわして下さいました」と。「知恵のある者や賢い者」の対極に「幼な子」を置いています。たかが子ども、知恵のある者や賢い者の対極に置かれるのです。置くことによって、知恵のある者、賢い者の、知恵や賢さをえぐり出したいのかも知れません。「幼な子にあらわして下さいました」と、その一言で知恵や賢さなるものをえぐってしまうのは、イエスだったらありそうなことです。言葉を連ねて、論証するのではなく、身体的な生きる姿で、しかし中心を外さずに示して見せているのが、イエスのやり方です。イエスにとって幼な子は、未完である人、いまだ人にあらざる人ではありません。知恵や賢さでしか、それを身にまとうことによってしか生きられないのではな

い人、それがイエスの幼な子です。たとえば、道端で出会う小さな芽吹きやその発見が、生命の営みそのものとして見える人、それが幼な子でした。生命の解説者ではなく、出会った生命と一緒に生きる人が、イエスの言わんとする幼な子、ということかも知れません。

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」(28～30節)。もしその荷が重いなら、わたしにゆだねなさい、休ませてあげるからと言います。わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい、あなたがたの魂に休みが与えられるであろうと言います。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いと言います。だからと言って、重荷が取り払われ、くびきを誰かが代わりに負い、結果、重荷やくびきから解放されますよ、と言いたい訳ではありません。“代償”が求められていて、その場合のカギになる幼な子です。

たとえ誰も関心を持たなくても、自分は決して生命あるものへの慈しみを放棄しないと言う覚悟をもって、幼な子は生きるのです。言うところ

の幼な子は、平均的な多数に立つことを拒否します。“柔和で負いやすく軽い”の中に、貫かれているもの、そして幼な子が担うものは、たった一つ、たった一人であっても、生命あるものを裏切ったりはしないのです。その意味とその重さは他の何とも比べようがないのはもちろんです。

(菅澤 邦明)



～今月のいのり～

雨粒が木々の緑を一層鮮やかにしています。街の中に暮らす生きものたちの中に、小さく愛らしい新しい命が生まれているのを見かけ、心も潤ってくるのを感じます。

たくさんの死があって、たくさんの生がある。私たちはその事実を知りながら、“普段・日常”を守ろうとして、それらを遠ざけて見ないふりをする時があります。今はこの世になくとも、繋がって来た命があって新しい命が生まれること、その命がまた次の命へ繋がっていくことを、どうか恐れずに見つめることができますように。

3月11日に起きた震災から2ヶ月半、被災地のこと、子ども達のことを思い続けています。私たちが思いを寄せる働きが、どうかあなたに守られますように。

(大平 有紀)

“新たな出会い・そしてつながりへ～”

入園・進級から約1ヶ月がたち、幼稚園や新しいクラスにも慣れてきた子どもたち。朝、門でそっとぽっぽ組の手を優しくとるお兄ちゃん・お姉ちゃんの姿。園庭で、泣いているぽっぽ組を心配し「どうしたの？だいじょうぶ？」と年長組が声をかけている姿。最初は「ぽっぽさんがね～」だったのが「ぽっぽさんの〇〇くんがね～」と嬉しそうに名前を特定して話す姿。“新しい場所”“新しい存在”との出会いを通じて広がっていくつながり～。ただ、そこに当たり前のように自然に“みんながいる”こと

の幸せを感じている毎日です。今年もまた多くの出会いが与えられたことに心より感謝いたします。

そして、この時期には幼稚園の畑のいちごとの出会い！！今年植えたいちごは、白い花ではなくピンクのかわいい花が～。「いつたべれるかな～？」「いちごのあかちゃんができてから、もうすぐだね♪」とみんなで赤くなるまで見守ってきたいちご。去年はカラスや大雨の影響を受けたり～だったため、今年は、早めにネットもかけカラス対策はばっちり。でも、お天気だけは・・・晴れの日も

あつて～雨の日もあつて～です。今年も何日か強い雨が続き心配しましたが、雨にも負けず毎日赤い実をつけたいちご。まさに、太陽の光や雨など自然の恵みがたっぷり！！のいちごを味わいました。自分達で摘み、摘みたてを畑でみんな一緒に“いただきます！！” いちごはやっぱり摘みたてが一番おいしい♪そんな豊かな体験ができるのも畑を貸して下さっている方がいて、水やりや草抜きなど畑仕事をして下さる方がいて～と多くの方との出会い・つながりがあつてこそです。

また、年長組は後川へと出かけ、田植えしているところを見学させていただきました。今まで、たくさんの交流を深めてきた後川。今年は田んぼ・茶畑を幼稚園に貸していただくことになり、また新たな出会い・つながりが～。目にする機会の少なくなった田んぼに稲が機械で植えられていく瞬間をジーンと目を輝かせ見つめていた子どもたちの姿。子どもたちのためにいろいろと真剣に考えて下さる方々がいるからこそ実現した豊かな体験。「すごいなあ♪」「あれが、お米になるん？」「おにぎり食べたくなってきたなあ・・・」「(田んぼ)どろどろやなあ」「誰が、水やったりするん？園長？」「園長が機械乗ってる♪」・・・途切れることのなかったみんなのつぶやき。この体験が子どもたちへのこれからへとつながってい

くことを感じたひとときでした。

さらに、お子さんが共同幼稚園を卒園された方との出会い・つながりから子どもたちと一緒にさくらんぼを摘み、味わせていただきました。卒園されても今なお、つながる多くの絆。大きくなっても、何年たっても、ふと思い出せる幼稚園での日々。とても素敵だなあと思います。そんな幸せな日々を私も子どもたちとつないでいけたら・・・。

本当にたくさんの方に支えられ見守られ過ごしている子どもたちとの日々。でも、だからこそ感じることでできる出会い・つながり。今までの出会い、そしてこれからの出会いを大切に子どもたちと共に新たな毎日を歩んでいくことができますように・・・。

(池ヶ谷 里沙)



おっさんの通信制大学院学習記

地震から、あと少しで2か月になろうとしている。ひと月前に「地震から4週間後」のことを書いたが、今回はむしろ、「揺れた数日後はどうだったか」について、僕が自分のブログに書き留めていたことを再構成してみる。

☆ネットカフェ中に響いた緊急速報

その日、勤務先近くの藤沢駅の北口から地下道を通り、築約40年の「フジサワ名店ビル」の地下を抜けようとしていた。「名店」の地下の入口のあたりで、何人かの客や店員が「あれえ……揺れてない？」と不安げな顔をしたのとほぼ同時に、館内に「地震です。皆様身の安全を確保して下さい」との放送が流れた。近くの階段から地上に上がると、揺れはそこらが本番だった。ビルは激しく軋み、一部はがれた壁なのか、粉のようなものが空からたくさん降ってくる。僕は慌てて建物の近くを離れた。

付近の道路は黒山の人だかり。とりあえず揺れは収まったので、僕は予定していた場所に向かった。ところがそこでも余震である。店員さんたちが揺れるたびにハラハラしていた。僕は用事をそこそこに済ませ、職場に戻った。

その後、未だ心配そうな障害者共同作業所の利用者に何とか帰ってもらったものの、いつも使っている小

田急をはじめ、藤沢を発着する一切の鉄道は止まってしまってどちらの方向へも進めないまま、結局僕は、藤沢駅南口のネットカフェに泊まった。

翌朝は、ネットカフェの「10時間バック」が切れる6:30頃に出店。それまでの間も、緊急地震速報のたびに携帯電話がキューキュー鳴って大変だった。出勤、いや、職場に戻ったのが7:30頃。担当する仕事がちゃんとある利用者以外最初出足は悪かったが、12時を過ぎる頃からぼちぼち集まり始めた。僕は夕方、区間運転が始まっていた小田急線に乗って、帰路についた。自宅は棚のカセットテーブルが少し落ちたくらいで、食器も、壁も大丈夫だった。

☆輪番停電は輪番不通

翌週からは「輪番停電の恐怖」に襲われた。一部原子力・火力発電所の操業停止による電力供給の逼迫により、東京電力管内で地域を決めて順番に電気を止めるという、おそらく歴史的にはこれまでになかった規模の停電を行うらしい。夜、灯りが消えれば早く眠ればいい。冷蔵庫の氷が融ければまた作ればいい。でも、たとえば日常的に医療機器を動かさなければなしの人なんかはどないするの？ そんな人たちのことも電力会社は考えてるの？ そんな疑問をほったらかしに

して、停電は始まった。停電実施初日の14日には、JRが停まっていて妻が出勤できなかったこともあり、徒歩経路を調べついでに、電車で10分の駅から90分かけて歩いて自宅へ引き返してみたりした。

僕の勤務先で、計画された時刻から40分ほど遅れて電灯とエアコンが「ブツッ」といったときにはさすがにドキッとした。コピーもできない、PCも使えない、電話もかけられない2時間。昼間だったとは言え灯りがないので、お手洗いには懐中電灯を持って入らねばならない。

また、停電に合わせて電車も部分的に停まる。それが僕の通勤時間帯に引っかかると、えらい回り道をせねばならない。

例えば西宮北口から阪急神戸線で梅田へ通っている人が、「今日の出勤時間帯に運行しているのは阪神線では甲子園・梅田間と、阪急は今津線の西宮北口から宝塚までと、宝塚線は宝塚から十三までだけ、神戸線は全線不通！」と言われたとしたら、さあ今朝はどないやって会社に行こかいなと苦慮するだろう。しかもその不通の区間や時間が毎日コロコロ変わる。誇張でも何でもなく、そんな感じだったのだ。

そんな悩みも努力も、もう遠い昔の話のようだ。3月28日以降停電は実施されていないし、街は以前と同様の賑わいを取り戻している。でも、

今日東京からの帰りに乗った電車は、窓が開いていたし、扇風機が回っていた。電力供給が多少復活しても、この状態を続けた方が実は幸せだと考えているのは、僕だけではないはずだ。

「その日」と「すぐあと」の話
岩倉智久（神奈川県大和市在住）
5月7日に記す。

「おっさんの通信制大学院学習記」 執筆者について～

岩倉智久（いわくら・としひさ）
または、千兵衛。1980年代の学生時代、友人に「教会の礼拝堂でロックバンドのライブやるねんけど、けえへんか？」との誘いに、物珍しさ半分で出かけていったのを機に、公同教会のファンになる。

以後、関東へ引っ越すまでの正味1年半の短期間だったが、広島キャンプのお手伝いや、教会関係者（含・中学生だった菅澤真央くん）の家庭教師などをさせていただく。

今でも、帰省した際などには時々日曜の礼拝に伺っています。公同教会での数々の出会いは、僕にとって大切な宝物です。

みかん便り

こんにちは。ある日を境に急に暖かくなりましたね。避暑地を求めて一人で海へ行ってきました。中には入りませんでした。愛媛の海はとてもきれいでした。大学の友達、愛媛、福岡、宮崎、尾道と海の近くで育ってきた奴ばかりなので、誰も「なんで海見にわざわざ行かなければならんのか」と、乗り気になってくれません。寂しいです。夏はみんなで泳ぎに行くので、それまで我慢です。

今年で学生生活最後です。夏休みもGWも最後です。そう思いながら、大学生生活、どんな夏休みを過ごしていたのかを考えていました。4回生になってからよく昔のことを思い返します。大学生が終わってしまうのが寂しいからですかね。それで、過去のみかん便りをちらちら読むことが増えました。

1回生の頃は熊本県の上天草市へ行きました。第1回のみかん便りで書いた内容です。陸の孤島というのがしっくりくる街。『財政破綻寸前の街に元気を！！』と意気込み行きましたが、自分の親より自分たちに一生懸命に動いてくれる大人たち。誰よりも自分たちのことを考えてくれていました。別れの時、このスタッフさんの涙に涙しました。「みどり園」のみんなも、始めは警戒心バシバシでしたが、最後はみんなで踊って、見

送りに来てくれました。そして、デイケアセンターのおぼあちゃんたち。「みんなが来てくれるなら、来年まで生きてられるよ。ありがとう。」「ありがとう。」「ありがとう。」踊る以外、何もできませんでした。でも、それでも「ありがとう」と言ってくれました。ありがとうと聞く私たちは、何もできずにただ泣いていました。上天草の思い出は大学生活TOP 3の思い出です。

過去のみかん便りには、上天草についての細かい思い出はあまり書いてありませんでした。でも、一つを思い出すと、数珠つなぎにどんどん思い出がよみがえってきます。

「俺らは今回の熊本遠征にしろ、毎年の札幌遠征にしろ、優しい大人が周りにはいっぱいいる。でも、絶対に優しさに慣れたらあかん。忘れてもあかん。いつもその優しさを純粋に受け止められるような人間にならんあかん。」

「人の気持ちを踏みにじるような行為はあかん。気持ちは思ってるだけでは伝わらん。気持ちが伝わったって相手に伝えることが大事や。」これはずっと頭の中に残っている言葉です。このころに思い感じたことだったんですね。

1回生は熊本へ、2回生は全国の祭りに参加し、3回生はインドに行きま

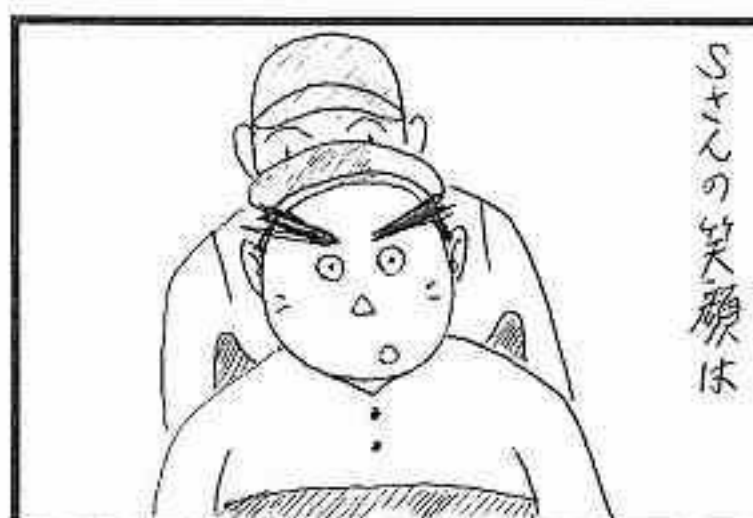
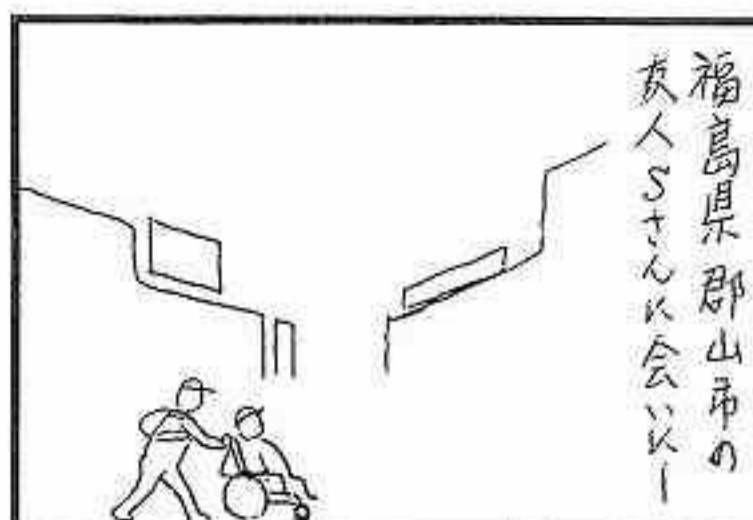
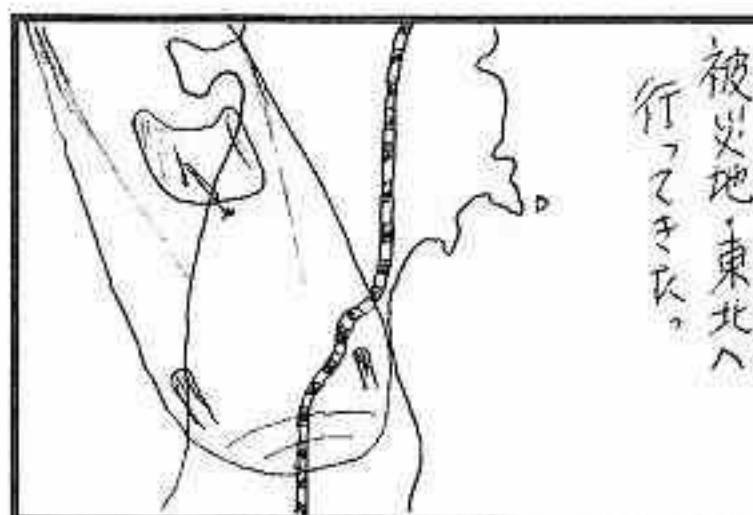
した。だらだらと3年間毎日過ごしてきたと思っていましたが、意外と充実した生活を送っていますね。そして今年。今は教育実習前で毎日社会科の勉強をしています。自分は高校まで理系の人間でした。なので、地理、歴史、全般わかりません。生徒もこんな自分に教わるのは時間がもったいないとも思います。教育実習先の生徒の大切な時間を無駄にしないため、そして、教師になった時の教養として、今必死に勉強中です。教育実習は5月27日から、6月17日までの3週間。今できることを精いっぱいやってこようと思います。一皮むけるかな。やるしかないですね。楽しみです。それでは☆

(河村 高志)



晴れのち福ちゃん さちあ画

友 来 たる



特別礼拝のご案内

日時：2011年6月5日(日) 午前10時45分～

場所：西宮公会教会礼拝堂

説教：「光あるうち光の中を歩め」

新免貢先生(宮城学院女子大学、東北関東大地震・
大津波ボランティアセンター)

聖書：申命記書15章7～8節

マルコによる福音書13章1～8節

安心して暮らせる今までの暮らしに近づきたいが、「置かれている状況はあまりにも深刻」と40年の船員生活の後、漁業に従事する60代半ばの男性の言葉が印象的で、すべてを物語っている。月極めの給料がふところに入ってくる者と、海を相手に生業を営む者は、今回の震災の受け止め方が根本的に異なると思われる。

(「じしんなんかにはまけないぞ! こうほう No.31」 新免貢)

◇関西神学塾特別講義

日時：2011年6月3日(金) 午後7時～午後9時

場所：西宮公会教会集会室

講義：「安心して暮らせる社会を目指して」 新免貢

花の日合同礼拝

日時：2011年6月12日 午前10時～ 場所：西宮公会教会礼拝堂

幼稚園、教会学校の子ども達と共に、花の日合同礼拝の時間を持ちます。礼拝後は花をもって教会墓地を訪ねます。



2011年5月29日

人と神、人と人をつなぐ、難しい働きをしています

日本基督教団 西宮公会教会

教会学校から

《2011年4月の活動報告》

◇4月3日(日)

東北・関東大地震、大津波被災地を支援する活動

◇4月10日(日)

宮城、福島の教会にメッセージカードを送ろう

◇4月17日(日)

お父さんたちと一緒に遊ぼう。

高松公園つなひき大会・仙台のおやつを食べる

◇4月24日(日)

イースターの集まり



《2011年5月の活動予定》

◇5月1日(日)

DVD鑑賞会「もうひとつの動物園～絶滅動物物語」を見る

◇5月8日(日)

お母さんと一緒に幼稚園の畑で野外礼拝

◇5月15日(日)

みんなで踊ろう！“マルマル・モリモリダンス”



◇5月22日(日)

ストローあめを作って福島県に送ろう！／統一マダンに参加する



◇5月29日(日)

石川啄木シリーズ うた、カルタ、クイズで遊ぼう

◇教会／教会学校

- ・5月 1日(日) 早天祈祷会(毎月第一日)
- ・5月 10日(火)「ゆっくりと聖書を読んでみませんか」
「“お母さん”を考える」(毎月第二火曜日)
- ・5月 11日、25日(水) 読書会(毎月第二、第四水曜日)
『痴呆を生きるということ』(小澤勲著)
- ・5月 15日(日)～16日(月) 2011年度兵庫教区総会 於：ユニトピア篠山
- ・5月 17日(火)「“教会の火曜日”読書会」
『隠される原子力・核の真実』(小出裕章)を読む(毎月第三火曜日)
- ・5月 18日(水) 聖書研究祈祷会(毎月第一、第三水曜日)
- ・5月 21日(土) NPO法人「人と人および人と自然をつなぐ企画」総会
- ・5月 22日(日) 統一マダンに教会学校・射的の出店で参加
- ・6月 5日(日) 特別礼拝・新免貢先生

◇幼稚園

- ・5月 3日(水)～4日(木) 幼稚園研修
- ・5月 7日、21日(土) 公同文庫
- ・5月 9日(月)、26日(木) 年長組後川・田植え

◇にしきた商店街

- ・5月 1日(日) 川掃除(毎月第一日曜日)
- ・5月 18日(水) にしきた街づくり協議会
- ・5月 24日(火) にしきた街舞台実行委員会
- ・5月 26日(木) 西北活性化協議会

6月3日(金) 関西神学塾の特別講義、6月5日(日)の西宮公同教会聖日礼拝説教を、新免貢先生(宮城学院女子大学)が担当して下さいます。3月11日の東北関東大地震・大津波とその後の様々な出来事について、被災地で直接感じたことを話していただく予定です。

◇アートガレーヂ

- ・5月 3日、17日(火) 丹波野菜市(にしきた商店街)(毎月第1、第3火曜日)

◇関西神学塾

- ・5月 13日(金) 午後7時～9時 使徒行伝を読んでみよう(58) 講師：桑原重夫
- ・5月 20日(金) 午後7時～9時 トーラーを学ぶ(8) 講師：勝村弘也
- ・5月 21日、28日(土) 午後2時～4時 キリスト教史 講師：田川建三
- ・5月 27日(金) 午後7時～9時 マルコ福音書注解(中)(79) 講師：田川建三
- ・6月 3日(土) 午後7時～9時 安心して暮らせる社会を目指して 講師：新免貢

東北・関東大地震・大津波の被災地と被災者に、西宮公同幼稚園園庭のパン窯“アルトス”で、六甲の自然水、国産小麦、白神こだま酵母を使ったパンを焼いて届けています。6月のパンを焼く日は3日、10日、17日、24日(いずれも金曜日)の予定です。

大切な贈り物・津門川 102

“津門川の自然②”



2011年5月19日、南昭和町自治会の方からかかってきた電話で、「四十谷川にカモの親子がいる」と教えてもらいました。すぐにカモ小屋を作って川に浮かべましたが、全部で9匹のコガモを連れてお母さんカモは移動を続け、親子は今は別のところにお引越しているようです。



つとがわ 編集後記

おびただしい人の命が奪われることになった。大きな地震と津波、原子力発電所の大きな事故の後、それらの言葉をいっぱい聞いてきました。しかし、原子力発電所の大きな事故が、通り一遍の評論を許さないのは、終わりのない始まりであることを予感させるからでした。事故から2ヶ月半経った今も、終わりが見えないまま、新たな困難が起こり続けています。一番の当事者である電力会社が、事実・真実を過小に発表し、その都度の対策が及ばなかったりするのは、起こった事故を認めたくはないという思いと、事故が余りに大きいということの両方であるのかもしれませんが。いずれにせよ、電力会社はもちろん、この国で生きる誰もが、原子力発電所の大きな事故という、とりかえしのつかない事実・真実を引き受けて生きるよりなくなったのですが。

(K)

幼稚園のメダカたちが今年もまた産卵の時期を迎え、お腹に卵をいくつもくっつけて泳いでいます。毎朝、メダカの水槽を覗き込む楽しみが一つ増えました。元気な赤ちゃんメダカにたくさん出会えますように。

(I)

姉が1人暮らしを始めました。毎日寝る時間までは、家族4人リビングでテレビを見たり、話をしたり…だったので、1番おしゃべりな姉がいないと、家が少し静かになったような気がします。未だにケンカもしていたので、気楽になったのが半分、寂しさが半分という感じ。いつでも会える場所に住んでいるのですが…

家ではあまり家事をしなかった姉が送ってくる。晩ごはんの写真を見るのが、母と私の日課になっています。

(Y)

紫陽花が花を咲かせ黄緑色から少しずつ色をつけ始めています。今まで咲いてからしか注目してなくて、去年紫陽花の最初の一輪はどうやって咲くのか尋ねられてドキッ…としたことを覚えてい

ます。

子どもたちと“あじさいのあかちゃん”を見つけたときには感激！ツブツブしていて小さな小さなつぼみが大きくなっていくのを子どもたちと見守る時間を与えられています。きっと私一人だったらこんな素敵な時間を過ごすことはなかっただろうなあと思う今日この頃です。

(N)

一人で一方的に決められないけれど、叶うならば、エンドレスに子どもとの場にいたいなど最近思うことが多くなった。決定的だったのは一人の老人との出会い、障害のある子どもたちとの時間を選べたのは50歳代半ば、大学教授からの転職だった。そして今80歳代半ば、先年脳卒中で倒れられ、体躯の不自由、老齢による「聞く」不自由、そして話し方も覚束なくなり、字も。でも今も毎日子どもの生活の場に顔を出されている。いろいろできなくなっていく中で「この子どもたちに近づけた」、今のご自分が何も役に立たなくても「そこにいることが大事」「いるだけで幸せ」、きっと風景のようにしておられるのだろう。それって、いいな。ということで「一人で勝手に決めた」エンドレス〜♪。ところが26日年長の親子「自然の中で遊ぼう」ツアーの篠山後川で一日、天気予報で雨の確率大、と思っていたこともあり、たとえ雨の中でもいい時間だったと思っていたただくには、などの「気疲れ」が大きかったか。くたびれた、動けない(単に、はしゃぎすぎただけじゃないのと突っ込まれたが)。で、やっぱりもう駄目だわ、身体がついていかない。エンドレスは取り消しね。それって早すぎませんと早速突っ込みが。

(J)

